

令和三年一月七日

新型コロナウイルス感染症拡大に鑑み、「メール句会」「オンライン句評会」を実施。
兼題『雑煮』、『寒』

宮原 ユリ

冬ざれし住所不明で戻る文
充分に生きてどんどの炎かな
ジムノペディ独りまた良き冬の月
古里はそれぞれ二人雑煮食ふ
寒椿水盤に浮く余生かな

中村 晃也

大家族好みの数の雑煮餅
朝の陽にほのと柚子の香雑煮椀
静もれる山野に寒き朝の日矢
寒椿男坂との分れ道
炊き立てに黄身二つある寒卵

斉藤 まさお

妻の声に朝刊たたみ雑煮膳
寒凧や小舟に漁師線と点
初日記手回しの鉛筆削
巻きくせや床に寝かせる初暦
屠蘇の香や少し赤らむかっぱう着

志村 良知

年変わる汽笛の方に花火かな
残月のみて紅の今朝の富士
地酒二合酌み干し所望雑煮碗
会ひたしと願ふ賀状の続きけり
初弾きや今朝はピアノでどみそみど

内藤 まりこ

星冴える望遠鏡に土星の環
嫁ぎ来て里芋大根雑煮の具
温泉に浸かり手に受く細雪
ハヤブサに期待の笑顔春を待つ
雲の筋密に流れて寒に入る

長尾 進一郎

巢籠もりて一年経てり雑煮食ふ
窓ひとつ拭くたび休む大晦日
除夜の鐘誰か安寧願はざる
寒雀の軒を跳ね跳ぶ音せはし
鳥の声に背中を押され蒲団出る

大津 そうかい

寒さ沁む父母の昭和はいかばかり
宝輪に冬至の曙光煌めけり
廃線の眠り覆へる落葉かな
冬空に三日月富士のシルエツト
雑煮椀薄れし塗の床しかり

高橋 由紀子

小手一本素足も赤き寒稽古
雑煮餅の数口々に大家族
明けの欄干からす一鳴き息白し
冬入り日きびす返せば藍の雲
門松の訪う人もなく陽に映えて

首藤 しずを

疫病禍凌いで祝ふ雑煮かな
寒灯下釘打つ音の続きけり
墨の香や一筆ごとに淑気満ち
詫助を活ける男の太き指
男児欲しむづかる女兒と揚ぐる凧

新田 ゆふき

蕎麦雑煮餅いっしょくた独り膳
降り来れば寒に籠るや滝の壺
元旦は家族でありし昭和かな
コロナとて薄き日を浴ぶ居間炬燵
門ごとに柚子を実らす高麗の里

森田 元斐

厄祓へ杜の社に初明かり
初富士の書斎の窓に広がりぬ
蹲踞に揺れる木洩り日寒椿
居住まひを正し一礼雑煮膳
半鐘のゆるり遠のく大晦日

安藤 晃二

今朝の陽に香り広がる雑煮焼

人気なき元日の夜郵便車

節重を買ひ出でにけり大晦日

寒雲や相模の沖の瑠璃ひかる

雪吊りの汀の松の寄添ひて

次回は、令和三年二月四日（木）です。

兼題は、宮原ユリさん出題の『春めく』、並びに

西川知世さんからの『通』です。

季語を学ぶ 初学にかえて

西川 知世

二月の兼題は「春めく」

歳時記において春は立春の日から立夏の日までを
言う。今年は二月三日が立春となる。「春めく」は
体感と暦の上の春の違和感をうまく言い得ている。
春になってやってくる寒さに重きを置くのが「春
寒」、寒気が和らぎ暖かくなったほつに重きを置く
のが「春めく」。その小さな気づきを拾い上げるの
が季語の役割であり、五七五の制約のなかで多く
を伝える力を持つのが季語であろう。古来、厳し
い季節を抜けて、春を待つ心は切実なものであつ
たから、春にはその微妙な季節の動きを表す季語
が時候の中にたくさんある。一応すべて作ってみ

るのが一番違いを実感できるかもしれない。また、
春夏秋冬に「めく」をつけた季語があり、すべての
季節に挑戦すると季節を迎える心の違いがわか
つてきて、発見があるだろう。

春めくや藪ありて雪ありて雪

春めきし山の消え去る夕かげり

春めきてものの果てなる空の色

春めくといふ言の葉をくりかへし

葛城古道わが大足に春めけり

耶蘇村の春めくものに鐘の音

一湾に水尾のしろがね春きざす

荒れてゐる海のどこかが春めきぬ

一茶

虚子

蛇笏

みどり女

榮治

英雄

耕子

和子